

# 節分行事での子どもの体験と育ち

—雪国の園での観察から—

金澤 妙子\*

## Children's Experience and Growth through the Setsubun Ceremony

—From Observation at a Public Day Nursery in a Snowy Country—

Taeko KANAZAWA

### 1. はじめに

幼稚園や保育所などの就学前施設には、年間にわたって様々な行事があり保育にメリハリをもたらしている。「カリキュラムから行事を題材とすることをぬいたとしたら、果してどうなるだろうか。季節と行事を内容主柱としていたカリキュラムはおそらくカリキュラム構成のよりどころを失うことになるだろう」<sup>1)</sup>という言葉は、保育における行事のウェイトを物語っている。だからこそ保育界では、行事に追われて保育をすることや、行事を追いかける保育に繰り返しダウトをかけてきた<sup>2)</sup>。「なんのために保育の中に行事があるのか、ということを考えるときに、(略)その方向は園生活圏を境に外側に向けられたものと、内側に向けられたものである」<sup>3)</sup>とする大場は、保育内容としての「行事」は本質的に後者と考えたいとし、「それは子どもたちの生活の豊かな内容として創造されるものであり、生活の流れの節としての意味を持つ場合もあると考える」<sup>4)</sup>と述べていた。村石は「幼稚園は行事が多すぎると言った声」<sup>5)</sup>に、「日常の保育と遊離したとりあつかい方をしたり、そこだけ突出した力の入れ方をしたりすることへの戒めと受けとめたい…行事も保育の一環という考え方に立ち、いろいろな意味で子どもたちみなが無理をせず楽しく参加することができて、しかも子どもの心の中に何かを育てたり、残したりすることに役立ってくればよい」<sup>6)</sup>と考えていた。求められ続けてきた、日々の生活の延長としての行事の在り方は実現し、大人から見た見栄えに振り回される現実はなくなったのだろうか。久富は、「非日常の行事である運動会の取組を日常生活の中に入れ込んでいるので、子どもへの負担も少なく連続性もある」<sup>7)</sup>というある保育者の主張に疑問を呈し紹介している。

一口に行事と言っても、入園・卒園式のようなまだに式典の色合いの濃いものから、遠足、運動会、生活発表会など多様で、それをいっしょくたに論じることはできないし、それぞれの行事が保育の中でどのように行われるかによっても、その行事が子どもに

とって持つ意味は異なる。それは子どもによっても違う。だが、園内研修などで保育実践に深くかかわって研究する研究者も、「行事の時には園に出入りもしない」<sup>8)</sup>、かえって訪問を遠慮することもあり、平常保育の様子はよく知っていても行事はどうなっているのか知らないという声もある。具体的な園行事の様子は、研究としてよりも実践者の報告として紹介されることになりがちである<sup>9)・14)</sup>。最近では、北村<sup>15)</sup>はお泊り保育を、西宮<sup>16)</sup>は園行事での幼保の連携を考察している。井上ら<sup>17)・21)</sup>は、当日だけの一発打ち上げ花火的なものでなくいかに子どもの普段の生活とつなげて子ども主体のものにしていくかという視点で多様な行事を見直す取り組みを紹介している。他には、幼稚園と家庭との連携の在り方を園行事の実践を通して考察したもの<sup>22)・23)</sup>、わが国の幼稚園における運動会の起源、歴史についての研究<sup>24)・25)・26)</sup>もある。また、学校関係者評価として保護者による行事の感想を通して行事を見直している園<sup>27)</sup>もある。各々の行事の特性とその持ち方、それにより子どもの体験として異なる部分など、それぞれの行事の探求はまだ十分とは言い難い。そのうち、追難の伝承行事節分を取り上げて考えてみたい。

ここにとりあげる地域の公立園でも、保育時間の延長はじめ多様な今日的要求があるが、少子化、自治体の財政難などで正規職員が減らされ、時間パートの臨時職員（無資格者もいる）の働きに頼らざるを得ない現状もある。準備の大変な園行事の運営は、取捨選択する必要も出てきている。だが、長い間園行事として取り上げてきたのは、ルーティン化した部分もあるかもしれないが、自覚化の程度はともかく保育に取り入れる価値を認めていたからかもしれない。勤務体制・労働状況は現実問題として大きな要因だから見直しは必要でも、園の行事として取り組む意義を検討した結果でありたい。私たちの暮らしの中で年中行事としてあるというだけでなく、園でそのことに取り組んだのはなぜか、保育者はその行事を通して子どもに何を伝えようとしていたのか、それぞれの園行事で子どもがどんな体験をし、どんな育ちがあるのか、また期待できるのか（どんな育ちにつながっていくのか）を押えた結果であって欲しい。取捨選択し、削った行事での体験や育ちは補償しなくていいのか、必要だとすればどのような補償が考えられるのかが分かる。

## 2. 対象と方法

### ・研究対象園とそこでのかかわりのありよう

私は昭和61年～平成23年度までほぼ月1～4回のペースである地域の公立園で保育を参観した。平成5年度以降、園は固定している。壁際で記録を取り続けるというより保育の中に入ったようなあり方をしてきた。保育者は私の存在も含めて上手にその場の状況としてくれ、子どもたちもさほど違和感なく受け入れてくれていると思う。

- ・同一園での4年間の園行事節分の取り組みを参観し、保育終了後、思い出し記録を作成。その前後の保育の中での子どもや保育者とのやりとりを含めて園行事節分の取り組みを省察する。1、2年目は節分当日を終日参観し、理解を深めるために前後の様子などは保育者に質問した。その中で取り組みの最初から継続して見る必要を感じ、3年目は取り組み開始～節分翌日までを終日参観した。3年目の節分を中心にその翌年度の節分を含む保育を対象とする。また月1回、この地域の保育者有志がよりよい保育を目指して自分の実践事例を持ち寄り検討し合う会（以下、検討会）で3年目の節分を話し合った時出た発言や意見も視野に入れた。公立園は、職員の異動とともに行事についての考えややり方も動く。より広範囲の聴取は、この地域の保育者の園行事節分への思いや願い、その節分を子どもがどう体験し何が育っているかに迫るのに有意義だと思うからだ。個人情報に配慮し、読みやすさも考えて子どもの名前、クラス名のみ、仮名とした。顔の判別可能な挿入写真は保護者の了解を得たものである。

### 3. ある園の節分行事への取り組みの様子

#### (1) 鬼から手紙がやってきて：1月27日

ある5歳児が自分のクラスの窓のところにくしゃくしゃになった和紙（障子紙）に薄墨でしたためられた手紙を見つけた。「〇△やまからいつもみている。2がつ3かに行くぞ」という鬼からの手紙だった。みんなで震えあがって部屋に集まり相談する。鬼の手紙のことは、隣の3歳児クラスにも伝えた。分かっているかどうかは分からないがおびえていた



鬼からの手紙

3歳児もいた。鬼を見たことがあるという子どものうちシンは、見たよという私に「あっそうそう、去年写真とったじゃん！持ってきてよ」と言う。

鬼が中に入ってこないように「嫌いなもので追い払う」という子どもに保育者が「鬼って何が嫌いなんだろうね」と言うと、昨年、5歳児が中心になってイワシとヒイラギをつるしたことを覚えていて、「お魚と葉っぱ、ぎざぎざの…」の声。桃が嫌いなのだとの声も出る。保育者「桃？食べる桃？」、子ども「そうだよー」。保育者「なんで？」。昨年の5歳児担任が持っていた鬼の図鑑（『ヒサクニヒコの不思議図鑑①オニの生活図鑑』国土社）に書いてあるとの声も出た。桃は今の時期にないと大人が言っていると、子どもたちが缶詰でいい（昨年は、保育者が自宅から不用の桃缶を持ってきて缶のまま供えた）と言い、隣の店で買うことにした。ヒイラギは、モエが造園業の父親に頼んで

くれることになった。

そこへ昨年度の5歳児担任であったC保育者(当日、節分行事の担当者)が「鬼から手紙がきたんだって」とやってきた。手紙発見のいきさつを口々に説明する子どもたちに、びっくりしたり震えたりしながら「どうするのー」と言う。子どもたちは口々に鬼を撃退する方法や剣でやっつけるという自分たちの戦う意思を告げる。C保育者「えーっ戦うー!!」「どうやって?」。剣でという子どもたちに「剣?」「やだやだ、おっかないおっかない」とC保育者。担任「じゃ、去年はどうしたの?」、C保育者「みんな怖くて、鬼に見つからないようにじっと隠れていようとここ(部屋)に隠れ家つくってさ…」「あの○君だってビビったーって言っていたよ」と、昨年の5歳児の中では最も強そうだった子の様子を話す。子どもたちは少しシンとしたが、また剣を強くすればいいとか俺たちは強いという話に戻っていった。

## (2) 当日の過ごし方について：1月28日

「外で遊びたい。ホールとか入れる場所に隠れるとか?」という4歳児に対して5歳児は、ナオヤ「隠れなーい、サクラ(5歳児)だもん!」マミ「がんばる」の声。サクラ組全体としては、隠れない、かくれんぼしている場合じゃないもん、「アヤメ(4歳児)、ツクシ(3歳児)、タンポポ(未満児)を守る」というものだった。担任「タンポポ、ツクシはどうして狙われるの?」子ども「ちっちゃいから狙われる」。そのうちにだんだん元気がなくなってきたマリの様子に気づいた保育者が「大丈夫?」と声をかけるが、マリは首を横に振る。追い払う、戦う、やっつけるなどの意見が出て、剣を作ってやっつけることになった。

保育者「新聞紙で作るあの剣?」

子ども「うん。でもこう…固いやつ」

保育者「どうやって固くするの?」

子ども「ほら、あのー、ガムテープをこうして(と巻く真似)。顔いている子もいる。

剣の材料は、明日、担任が用意しておくことになった。5歳児は隣の3歳児クラスの担任2人に自分たち14人が戦うと言いにいく。アヤメ(4歳児)組は、「木のおうち(以前、在園児の父が大工で作って寄贈したものでホールにある)、カーテン閉めておいて、鬼に見つかっちゃうからガムテープとか張っておけばいい…」と決まった。リョウ「中で戦って豆をまく」、モエ「鬼がタンポポ、ツクシのところに来やすいから、モエたちがそこで戦う」、タケキ「何人で戦う?」14人の子どもとA先生(担任)1人の声に、リオは熱が出て戦えないの声が出る。5歳児は「私たちはアヤメの木のおうちには行けない」と確認し、明日から戦う道具を作ることにする。

食後、リオがとても怖がって「アヤメと隠れたい」と言いだした。リオのようには言えないが、マリもほとんど同じ状態である。周囲の子は2人に「怖がってばっかりじゃだめだから、戦ったほうがいい」「豆はまいてほしい」「無理してやらせると、風邪ひ

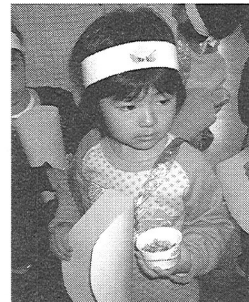
いちゃうかも(昨日熱が出た)」「A先生の近くにいる」「A先生が負んぶと抱っこで守る」「A先生のエプロンに隠れる」「1年生になったら頑張れ」「13人になってしまう」と言う声が出るが、アイ「あんまり無理しなくていいよ」「しょうがない」、モエ「平気、(13人で) やってみる」と言う声も出て、リオは隠れていることに決まった。マリは、「リオちゃんだけ隠れるなんて」と言えなかった。昨日の騒ぎもひと段落、「どうしてサンタの手紙は先生や子どもが発見するのに、鬼の手紙を発見するのはいつも子どもなの? へんだね」と疑問の声も聞かれた。

### (3) 様々な道具づくり：1月29日

朝から剣づくり。保育者は様々な紙を用意していた。新聞紙を棒状にして、カレンダーの紙・厚紙・段ボールを巻く。取っ手を付ける。強くするためにあちこち叩いてみてはまた補強する。まだ見ぬ敵・鬼の姿を想像しているようだった。

担任は、ヒイラギを持ってきてくれたモエをみんなの前に招き、とった時のことを説明してもらおう。モエは「歩いていった。そしてとった」と説明。少し赤みがかったヒイラギだった。担任はみんなに見せ、自分の住んでいる地域にもあるが緑だった、「赤くなったのはどうしてか聞いてきてくれる?」と頼んだ。それから、園に出入り口が何箇所あるかみんな考え、イワシを8本買うことに決まる。「あと5寝ると鬼が来る」と4歳児が数えて言う。

3歳児クラスは、相談の結果、鬼と戦うグループと隠れるグループに分かれた。戦うグループは相談し、桃ハチマキと桃ゼッケンを作って備えた。桃ハチマキは、前の週、市内のある園に行った際にも鬼から手紙が来ていて、園児たちが桃のついたハチマキをしていたのを見ていたからだろう、子どもから出たようだ。桃ゼッケンは、戦うためにはまず自分の身を守らなくてはと保育者が提案した。



桃ハチマキと桃ゼッケンで

### (4) 節分前日

#### ① 午前の活動で

5歳児全員でイワシ2パック(8本)と桃缶1つを買って自分たちでお金も払い園に戻ると、4歳児とともにイワシと桃缶を囲んだ。担任がイワシをパックから取り出すと生魚の臭いに「くさー」の声が上がる。「鬼が逃げていきそうな臭いだね」と言いながら、猫に食べられないよう透明のビニール袋に1本ずつ入れヒイラギの枝葉をつける。葉がとがっているため、保育者が軍手をして扱うが、



イワシとヒイラギでヤイカガシ?を作る

触わって「いてっ」と手を引っ込める子どももいる。赤いのはヒイラギナンテンという種類だからとモエが説明する。「鬼が刺されて逃げていくといいね」と言いながらつけ、イワシとヒイラギをセットにすると「ヤイカガシ」と言うのだと教える（正確にはイワシの頭を焼いてヒイラギの枝に刺す／筆者補足）。

次は神妙に正座した4歳児担任が桃缶を前に置き、身を乗り出すみんなを危ないと感じて缶きりで切る。蓋を開けると甘い匂いが漂い、おいしそう、食べたいなどの声も聞かれた（公立園全体で、0157以降、給食室から出すもの以外は食べさせないようにしている）。誰からともなく出た、「鬼ってこんなおいしいものが嫌いだなってねー」というのが一同の気持ちだった。「で、この缶詰をどうするの」と保育者が言うと、子どもからは「（紙で作っていた）桃に入れる」の声。桃缶はたくさん買えないので、新聞紙を丸めて桃の形にしてピンク色の折り紙で包み、緑の葉っぱをつけたものを4歳児が作り、一部はすでに入りに置いてあった。5歳児担任と4歳児担任が「入れる？」と聞き返すと、子どもたちからは身振り手振りを交えて口々に、「小さく切って…あの桃に入れて、テープをとってまたする。臭いがすれば逃げるから…小さくていい」、まとめるとそういう声が出た。桃は小さくするのに手がベトベトになるので、保育者が「これくらいいい？」と子どもに聞きながら進める。みんなは身を乗り出すようにして相槌をうったり保育者のやることを見て指示をする。ケチって小さくしたので桃が余った。担任は「この桃を食べて頑張ろう」と箸で小さく（7ミリ角くらいか？）切り、身を乗り出して自分の番を待つ子どもたちの重ねた両手のひらにひとかけらずつ配った。本当はこんな風に食べさせてはいけないことになっているので、保育者が「内緒だよ」と言いながら配ると、3歳児ハルオは「鬼に内緒」だと思った。

みんなで手分けをして桃とヤイカガシを入口に持って行く。給食室の搬入口に行った2人の子どもに私は付いて行った。そのうちのユイはヒイラギを自分の目の高さのあたりに何気なくガムテープでつけたが、「あっ…」と気づき「これっくらいだから」と自分の目の高さを基準に鬼がヒイラギのとがった葉で目をやられる位置を考えてもっと上に付け替えていた。ユイの中に背の高い大きな鬼がいることが想像された。

## ②午後、好きに過ごす時間で

食後、明日に備えて、また剣を強くしていると、C保育者が「本当に戦うってのー」とやってきた。シンは元気よく「ウン、これで」と強くした剣を見せ、戦うまねをする。口々に自分の剣を見せる子もいる。「おっかなくないの」というC保育者の問いかけに「おっかなくない」という声もあるが、あからさまに怖がっているC保育者に「ほんとう？」と迫られ、「ほんとうは、ちょっとは怖い」とか、苦虫をかみつぶしたような顔をする子もいて、C保育者はすかさず「そうでしょ、おっかないよね」「これで戦う？あんたたち鬼ってみたことあるの？」。昨年、（吹雪の中）ちらっと見たことや、雪の上についての鬼の足跡を探しにいったすごく大きかったという話になる。「そうでしょー。鬼はどのくらいの背だと思ってるの？私が165センチなのね。それでこのくらいだから

…」と、C保育者はクラスの入口の戸のところに行って自分の背を示し、「鬼ならこのくらいは軽く超すんじゃない」と入口の戸のてっぺんのさらに上を示す。

シンは「この剣で…」と切りかかる真似をするが、「これで鬼を切るには、こんな近くにいかなくちゃならないんだよ」「そんなに鬼のそばにどうやっていくの?」（みんなちょっと言葉もない…）「そんな近くまでいけば、こーんなにされるよ」とシンを前あきシャツの襟足からつりあげる。シンは「シャツを脱いで逃げる」と強気だ。「逃げるー? そんなことしている間に、やっつけられてしまうよ。おっかないおっかない。悪いことは言わないから、隠れていな」と言い、部屋を出て行く。これまで気づかなかったことを指摘され、具体的に行為で示されて意気消沈、逆に不安を打ち消すかのようにカラ元気な子もいた。

### ③昼寝起き後のおやつテーブルで

私の前に座ったタツヤは、座卓に肘をつけて両掌で頬から顎を支えながら「明日は鬼退治、何色の鬼がくるかなー」と言う。私が「何色だと思う」と聞くと、「クロ!」。私が「黒一?」と言ったのがきっかけで、周囲の子どもたちからも赤とか青とか黒とか声が出て、やってくる鬼の色を話題にして食べた。すでに怖がっている子、怖くないと強がっている子もいる。

### ④帰りの会で

担任「あしたはいよいよ…」、子どもたち「鬼」。担任「鬼はいつ来るんでしょう」、3との声に、担任「2月3日。みっかというのは3の事です。去年は赤鬼だけだったけど今年はいっぱい来そう。(雪の上に)鬼の|| (足跡みたいな線)があったって」。それから豆を見せ、去年の5歳児からもらって作った豆で、芽が出なくて困っていたがおじさん(管理員)が助けてくれたと話す。

作戦を立てる。「2人アヤメ組の(ホールにある)家を見張って、そしてあそこを…して、そこにオニが来た時、パッと行ける」「見張っていれば家には入れないけど…」「私たち9(10)人の力を合わせないと…」と各自いろんなことを言い、ムードとして確認し、結束していく。タケキは顔色が悪い。彼の祖母や母によると、怖がるので鬼なんかいないのだと言ったそうだが…。その様子に担任は「楽しい豆まきもあります」と明るく告げた。

## (5) 節分当日

### ①ドキドキの朝:8時半前の子どもの様子(担任談)

- ・早朝保育で来た子は、「鬼はいつくるか?」と剣と豆入れのバックを身につけていた。
- ・口々に「あー、今日だね」と言いながらの登園風景だった。
- ・最初からとても怖がっていたリオは、前日体調不良で早退したが、鬼が怖いこともあって休んだ。登園しそれを聞いたマリは「えー」と顔をこわばらせていて、自分も休みたい気持ちを抑えて来たのに…という気持ちが伝わってきた。

- ・シンは昨日と同じシャツを着てきた。家で別のものを着ていくようにとか、前をしめるように言われたが、(昨日のC保育者の指摘に)鬼に首ねっこを捕まえられたら脱ぎ捨てて逃げられるように考えたらしかった。ぶかぶかのゴム手袋もしてきていて、身を守ると同時に、鬼に手をつかまれた時やはりすりと手を抜いて逃げられると考えたということが、お便り帳や保護者の話で分かった。昨日、剣も家に持ち帰って母親と強く作りなおしたらしく、母親が彼の鬼への思いに付き合ってくれ、いい親子の時間を過ごせたのではないかと思う。

## ②豆を囲んで

8時45分からホールで園長がホットプレートで豆を煎る。香ばしい匂いが漂う。見ている「緑が何で黄色になるの」と言う子もいる。保育者が「アッチチだよ」と言うが手を出し(2歳児)、熱さにパッと豆をこぼしてしまったりする。9時45分、ホールに集まり、ステージに作った祭壇に煎った豆を供え、みんなで祈る。「パワーをつけて鬼を追いかおう」とアルミホイルに入った豆を年の数プラス1つ食べ、投げる豆をもらって鬼の襲来に備えた。

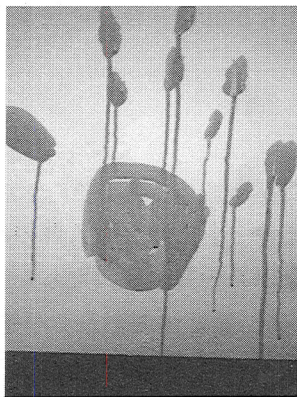
## ③鬼が来たー!!

10時、スピーカーからガォーという音と同時に、庭に鬼が登場、金棒を振り回している。びくつき泣き出す子もいる。ホールに肩よせて集まり、3歳児クラスのベランダで鬼に豆をなげていた。そこへもう一度轟いた大きな音にびくつき中に入って戸を閉めようとしたところ、ズックが片方脱げてレールにはさまり、一瞬迷ってうろついたが、間一髪ズックを拾って辛くも逃げ切った3歳児は「超ビビッタ!」と高揚していた。2、3歳児は押し入れコーナーに隠れたり、保育者にしがみついて泣いている子もいる。

恐怖がちょっとゆるんだところに、「サクラさーん!お部屋が大変だよー!!」の声。みんなが飛んでいってみるとサッシの窓ガラスにピンク色(血のつもり。赤だとちょっとリアルだと思ったらしい)の鬼の手形があり、そこから絵の具がしたたり、部屋の窓外には茶色っぽく汚した雪の上に一升ビン、ビールの缶、菓子の袋、お椀などが散乱していた。それを見て「ラーメン食べたんだね」と言う子どもがいた。



鬼現る



鬼が窓に残した手形



鬼の酒盛りあと



④楽しい豆まき：10時30分～節分ハッピーデー

小正月の鳥追い<sup>注1)</sup>行事で鳥を追って地域の各家を回った際にごくろうさまといただいた袋菓子  
を落花生と共に豪快にまき、未満児からクラスごと  
に拾う。袋の口を中身ギリギリまで絞って比べ  
る、袋の中を覗きチョコの種類を見て「あっ、お  
んなじだ！」などと言っている。



豆（落花生）を拾う

⑤冷静になってみると

鬼が去って平穏が戻ると、鬼の存在を疑問視する声、でもどこかで信じている声が相  
次いだ。

<鬼の存在について>

- ・大泣きした5歳児ママ「あれって音楽だよ。遠くまで音(楽)が聞こえる」の声あり。
- ・ケンスケ「ねーねー、あれってCDだよ」私「あれって？」ケンスケ「鬼」
- ・「あれ(鬼)って偽物でしょ。だってお面かぶってたよね」の声に、4歳児ヒトミ「えー、偽物じゃないよ〜」「えー、だいち〜…」「あー、そっか、そうだね〜」と5歳児ノリカに言いくるめられる。
- ・「足の先みてた?」「下駄とか履いてた?」「わらで作ったビーチサンダルみたいの(かんじき)<sup>注2)</sup>じゃなかった?」
- ・「先生たちだよ。…ちょっと小さくしたんだよ。だって遠くからあんな音がするわけじゃないじゃん」
- ・「パンツがぶかぶかしてなんか紙みたいだったな」
- ・「顔はみどり」
- ・「風呂敷着てたって?」
- ・シン「こうやって(剣で)バギ〜と襲うと思ったけど、桃があったから…」
- ・アイ「終わってよかった。夜、来るんじゃないのー」
- ・「ヒョウタンみたいのつけてたね」

<窓外の鬼の酒盛りあとを見て>

- ・ビールが3本でお酒が2本転がっているのを見て、「じゃ3人だ」「違う、その1人が…」「ラーメンか」「ラーメンとった」
- ・4歳児カオリ「これ絵の具だよ!」
- ・酒飲み過ぎてゲロはいたら(こうなった)…
- ・5歳児アイ「別のところで飲んでここに来て、また飲んだから…」
- ・4歳児シュンタ「本当に鬼いるの?」5歳児ナオヤ「なんでそんなことになるの?あれ鬼じゃないよ」
- ・「鬼は3人来た。アッチ(タンポポ)とアッチ(スマレ)とコッチ(サクラ・アヤメ)」
- ・4歳児ケンスケ「これ、おうちから盗んだやつだよ」「ぼくたちが3歳の時鬼がきた

でしょ…」(手形を見て)「これが目で…これが…人みたい」

・「なんかさー、これ豆まきで取ったやつじゃん」(豆まきで拾ったチョコがあったのを指摘)

・私「朝はなっていなかったの？」子どもたち「なかった！」(冬、子どもはこの園舎脇を通らないから…)「手形は朝なかった」(確かに)

クレヨンで自分たちの見た鬼を描いてみようと思任が投げかけたが…。ツノが1本の子、2本の子、後ろにあったという子もいた。「口ってどんな口だった?」「パンツは黄色と黒だった」「長靴はいてたよ」「かんじき忘れてる」などの声…。ユイは描いた絵を見て、「これでいいかなー」と首を傾げていた。考えてみると全体像はよく覚えていない子どもたちであった。しかし、子どもの鬼の捉えを大人も楽しんでた。

午後、アイが本当は、昨夜、「想像しすぎて寝られなかったけど、いつの間にか眠っていた」と打ち明けると、「自分も…」と告白する子もいた。3歳児で入園し、いつもスキップしてはずんでいるナオ。おやつの時、私が「いつも保育園楽しくてしょうがないでしょ」と言うと、ナオは「でも、今日は鬼がちょっと怖かった…」と言う。いつものスキップは見られなかった。

## ⑥帰りの会で

「怖かった」「楽しかった」と感想が聞かれた。担任「明日は立春。やっとな春が来ます。春ってことは…サクラは?」子どもたち「いちねんせー」、担任「アヤメは?」子どもたち「サクラ!」。担任が「豆、効果があったでしょ。大事にしまっておいて来年まいてください」とビニール袋に入った大豆を4歳児組に渡すと、子どもたちは担任と共に神妙に受け取る。

## (6) 節分の翌日

### ①登園で

玄関に昨日の鬼の写真をコピーした紙の下に「赤鬼だった?」と赤いマジックで書いた紙がボードに張られ、前日の余韻を醸していた。リオは、昨日弟が風邪で休むことになり、自分も園に行きたくないと大泣きして駄々をこね祖母が弟と一緒に見てくれ‘難’を逃れた。登園すると、「昨日大変だったんだよー」「なんで来なかったの」と会う人ごとに言われ食傷気味だったり、きまりが悪そうだった。でも「昨日鬼が来たの? どうだった?」と友達にこっそり聞いていた。ナオは帰宅後炬燵で寝てしまい、少し風邪気味で熱がでた。「また、鬼の熱がでたんだよ」と言っていたという。トイレも母親と一緒にないと行けなかったそうだ。

### ②子どもの言葉から知る各家庭の鬼と豆まき

前夜、豆まきをした家庭も多く話題になった。父親が鬼になった、豆をまいた、カップラーメンやうどん、もっとすごい景品のようなものをまいた、節分に父親が仕事で不在のため1週間延期して行う予定の家、父親がいるこの間の日曜日にすませた家もあつ

た。アイは、節分前日には「鬼ども待ってろよ!」と言っていたのに、帰宅後、園での鬼について聞かれても何も話さなかったそうだ。モエ「鬼は来なかった。でも、カップラーメンをまいた」、シオリ「豆まきはしたが鬼は来ない」、マリは「福はうちーとしか言えない、鬼のオも言えない」状態だったらしい。「昨日お家に帰っても鬼が怖かった人」と担任に聞かれ、何人か手をあげていた。

### ③保育園ごっこで～節分の相談の時を再現

保育者役が鬼の手紙（この遊びの中で作った）が来たとそれを張った黒板の前に立ち、「明日は大きいクラスの子は休み。どうしようか」と子ども役に相談する。タンポポ組という設定で未満児役の子ども達が、口々に「ヤーヤ、こわーい」「どうしよー」などと赤ちゃん言葉で足をバタバタさせ不安におびえる。昨日の午後、緊張しすぎて節分前夜眠れなかったというアイの告白につられて、自分も同感していた子どもたちや最初から怖かったが言えなかったマリも赤ちゃんになって参加していた。下の子を守る必要がないからかもしれない。

#### (7) その後の保育で

12月、ケンスケは鬼や豆まきの絵を描き、鬼からの手紙発見の時のように窓にはさんでいた。豆をぶつけている絵だと言うので、「節分の時、お家に鬼が来た?」と聞くと、「ううん。だけどどこかにいるでしょ、だからぶつける」と言う。保育者に話すと、「(普段の豪傑な姿とは裏腹に)彼は本当に鬼を怖がっている。でも彼の場合は1つくらい心底怖いものがあったもいいかなって感じ」と言う。3月19日の帰りの会でも、明日が休みという説明をする際、「春分の日ってことは…」という担任に「もうすぐ春ってこと」と答える5歳児がいた。

## 4. 取り組みに見る子どもの体験と育ち

### (1) 春の訪れと成長の実感

子どもは大人のように、春になった、もうすぐ夏だなどと思って生活しているわけではないが、走ると汗ばむからだ、じりじりと照りつける日差しや水の心地よさ、心地よい風や冷たい風、降る雪や凍てつく氷に、からだで四季を感じている。中でも雪は、(かんじきでつけた)鬼の足跡が残る、偶然の吹雪が鬼の迫力を増すなど、演出に一役買う。以下のある年の節分の園だよりの一部にもそれを読み取ることができる。

その後、鬼の足跡を見に外へ。庭についていた足跡は思ったより大きく、不思議、不思議でした。足跡は○家の駐車場のところで消えていて、子ども達は空を飛んで行ったとか、金棒にまたがって乗ってったとか、それぞれがいろいろなイメージを膨らませていました。

雪に閉ざされた冬から雪解けの春への移り変わりは、単に自然現象だけでなく心情的にも大きな変化を伴う。担任が立春の話をする、それぞれ1年生や園の最年長組になることを元気よく誇らしげに確認する姿 [3. (5) ⑥点線] や、春分の日とは「もうすぐ春ってこと」と言う言葉 [3. (7) 点線] はその年齢なりに1つ大きくなるという節目を前に、期待に満ちている。雪国でも、立春（節分）を過ぎると少しずつ日差しも春めいてくる。どの人にとってもすべてを一掃し、新しい世界への扉を開く力が春にはある。子どもなりにその移行を感じているのだろうと思う。



雪国の園庭

## (2) 経験のため込み

イワシとヒイラギをつるすのは、疫病や陰気、災害を鬼にたとえ、節分に投げる大豆でその目を打つので、「まめ=魔目」であるといわれ、また「まめ」という言葉が「魔を滅する」に通じるともいわれている<sup>28)</sup>。その「豆のほかに霊力をもつといわれていたもの」<sup>29)</sup>が、ヒイラギの葉やイワシの頭などで、「ヒイラギの鋭いトゲは鬼の目を刺すといわれており、鯛は、臭いを嫌がって鬼がこないといわれてい」<sup>30)</sup>る。

だが、ヒイラギはこのあたりでは手に入りやすく、イワシをつるす習慣もないのに、子どもは鬼退治の方法として挙げています。検討会では、子どもに節分行事の由来を伝えるために読んであげる紙芝居や絵本などにイワシやヒイラギが出ており、それを実際に子どもに見せてあげたくて、この辺にはないヒイラギを手に入れたりしたことがあるという保育者もいた。そういう保育者の思いや「ヒイラギって？」というような子どもの問いに答えようとしたことがきっかけになって始まったと推察される。そして、子どもの中にため込まれて定着し、また鬼が登場する際には子どもから出ている。

鬼が襲来を告げる手紙に由来はないが、昭和52年頃、ある保育者が楽しませて思い出に残るような経験をさせたいと、(鬼の)手形を残しておくような仕掛けをして鬼が来るというイメージをふくらませたことがあったそうだ。鬼の手紙も、印象的な出合いをさせたいという保育者の思いがあったのではないだろうか。節分当日の鬼は1日、しかもいつときだけだが、手紙が来ることによって何日も前から鬼の存在を醸しだせる分、子どもと長くやりとりしながら、子どもの鬼に対するイメージが膨らんでいくのを保育者も楽しむこともできる。

昨年、鬼登場の段になって、それまで止んでいた雪が、急に横殴りの吹雪になった。戸外の向こうの方から、雪山（ブルドーザーが園庭に雪をかきあげてできた）に見え隠れしながら、金棒を持った鬼の姿が見えて迫力満点、怖さ満点の鬼だった。吹雪も止み5歳児担任と数人の子どもたちで、鬼はどこに行ったのかと園庭に出て、かんじきでつけた大きな足跡を発見して、鬼の足跡だ！と言っていた。私はその一行についていて、その足跡をカメラに収めた。シンがその中にいたかどうかは分からない。園に戻ってデジカメの中の写真をみせたのかもしれないが、シンの言葉 [3. (1) 点線] はそのことを覚えていることを示している。

園で行う節分は、節分の由来だけでなく、子どもたちがそれまでに園で経験したことにも左右される。桃（の缶詰）は昨年の5歳児担任が取り入れた。鬼は桃アレルギーだから桃が嫌いというのは、どうため込まれていくのだろうか。桃ハチマキなど、3歳児は前の週の体験がその発想に表れている。ただ、なぜ桃なのかなどはよく分からず、鬼を迎え撃つという全体の雰囲気の中にいる。そうしたことがまたため込まれて、次以降の節分の際に、表われる部分もあることであろう。

### (3) 環境を生活に取り入れる一大豆、ヒイラギ

この園では、5歳児が畑で収穫したエダマメの一部を秋までそのまま残し、節分に使用する。もとは1つだったものが違った種類・味のものになることを、こうした中で体験として知っていく。担任とともに来年の豆になる生大豆を4歳児に伝授する姿の中にも、もうすぐ卒園し小学校へ入学するという思い（5歳児）や、園の最年長に成長したという思い（4歳児）が行き交うであろう。女性だけの職場で畑作業にも疎く、収穫までの苦労話もあり管理員の力の大きさを感じ、感謝の念を持つ。その気持ちは子どもより大人の側に強いが、身近な大人を通して管理員の協力を思いを至らせる機会でもある。

現在は、生の大豆を家庭で煎って調理することも稀で、安価な節分セットが簡単に手に入る。熱による豆の色の変化に気付くような体験 [3. (5) ②点線] や香ばしい匂いに誘われて集まって豆を囲み、「アッチチだよ」と言われながら大豆に手を伸ばし、触って熱さにびっくりして豆をこぼしたりする経験も家庭では得難い。身近な環境の中から大豆1つ生活に取り込むだけで、様々な体験の広がりや深まりが生まれる。この地方では珍しいヒイラギに目を向け、触れ、家が造園業のモエを認識する機会にもなった。モエはヒイラギをとる体験をし、植物に現れる自然の変化に気付かされている。

### (4) 嘘だけど本当の世界

酒盛り後や足跡の大きさなどから、様々に想像をふくらませているが、本当に信じているわけではない。しかし、全く嘘だと思っているわけでもない。担任も「正体がばれるから鬼に近づかないでもらいたい」ということは明確だった。他園でも、中まで入ってこないで庭で大暴れしたり、音だけという鬼もいた。あまり怖がらせたくない配慮も

どこかにあるが、やはりどこかで本当にいると思わせたい。そういう保育者の思いと工夫の反映か、鬼に会いたいからイワシ、ヒイラギをつけない、戦ってみたいという子どもの声もその存在をどこかで嘘、どこかで本当と思っているからだろう。

ユイが、鬼が目をやられる高さを考えてヤイカガシを付け替える [3. (4) ①点線] 背景には、その時期に読んでいた節分行事の由来を伝える紙芝居『むかしむかし おにがきた』（清水たみ子・安井康二 教育画劇）があったと思われる。その中で主人公が、ヒイラギの枝にイワシの頭を刺しておく訳を聞くと、おばあさんが「…そのひょうしにはっぱの とげで 目を つつつくように っていう おまじないさ」と答えている。昔々の話として聞きながらも、翌日の節分に備える行為の中では、単なる昔話ではなく、本当に鬼がくることを想定しているところがある。「必死の顔で豆まき：声がただけで姿は見えなかったのに、なぜか黄色のツノが見えたという証言あり」というある年の節分の写真の添え書きは、見えないものを見る子どもの世界の豊かさを示すものでもある。

#### (5) 知恵を絞った様々な工夫

こうした行事は製作活動と結びつくこともあり、多様な体験をする機会になる。ここでも、武器や鬼退治に必要なものをいろいろ考えて作っていた。シンは春や夏の頃には、奇声を発するので午睡時はみんなと離して別室で保育者がついて休ませている姿があった。だが、この節分の取り組みでは、知恵を絞ってぶかぶかのシャツや手袋の着用を思いついたり、C保育者の指摘に紙を付けたして剣を長くするなど気持ちを入れ込んで様々な工夫をしていた。検討会では、紙のヒイラギを作ることになり、見たことはないが、紙芝居などから本当のヒイラギは痛いらしい、どんな厚紙がいいかといういろいろ考えたという報告もあった。イワシのチラシを切り抜いて窓に貼ったのに鬼が中に入ってきてしまい効果がなかった。「来年はどうしたらいいか4歳さん考えておいてね」と課題を残した節分もある。そうしながらもどこかで鬼の存在が受け継がれていく。

#### (6) 文字や数量の感覚を培う

園内を確認しイワシの数と照合する。鬼が来る日を数える。初め鬼は<sup>5</sup>の日に来ると言っていた4歳児もおり、節分は2月3日、‘みっか’は<sup>3</sup>だとも知らされる。この日は特別に菓子を手にし、友達と量を比べたり、こっそり1つ食べてみたりする。豆を数える、チョコと飴を分類し、さらにその中で同じものを発見（細分類）するのも楽しい。

#### (7) 地域とのつながり

小正月行事の鳥追いは、以前は小中学生が中心に担っていたが、今この地域ではやっていない。鳥追いの日、園児が鳥追いの歌を歌いながら地域を回ると、各戸から家人が出て菓子をくれるのは、廃れていく地域の伝統行事を園児（保育園）が担っていることへの褒美・お礼でもあるだろう。鳥を追って歌って回ることとお駄賃はセットではない。

だが年長児ともなれば、節分ハッピーデーでまかれる飴やチョコは、鳥を追って回った時に自分たちがもらったものだと分かっている。子どもの自覚化の程度は様々であろうが、地域で役割を担ったご褒美を通して子どもなりに地域とのつながりを体験している。

#### (8) 弱さを認める

自分の中にどんな鬼がいるか、追いつきたい鬼は何か話し合い、子どもたちは、生意気鬼、泣き虫鬼などと答えている。また、怖くてずっと表情が暗かったマリに気持ちを聞いてみた時のやりとりを、担任は以下のように記している。

保「本当はいやなんじゃない？」 マリ「うん」

保「じゃあみんなに話したら」 マリ「恥ずかしくて言えない」

保「だって怖いんでしょ？」 マリ「うん」

保「じゃあ私と言おうか」 マリ「うん」

いつも強がって、自分の気持ちを抑えてしまいがちなマリだが、今回は素直に自分の気持ちを話していた。本当に怖い思いがあるようなので、戦うことに強く誘えず、マリの気持ちをみんなに伝えようと思った。恥ずかしいのは、話すことなのか？それとも自分の弱いところをみせたくないのか？

私はマリの言った「恥ずかしくて言えない」という思いは多くの子にあったのではないかと思う。「鬼なんかやっつけてやるぞー！」「かかってこい！」ととても元気だったアイが、鬼が去った日の午後、ふと漏らした前夜の緊張の様子 [3. (5) ⑤点線] に他児2人も次々告白するあたりに、雰囲気の中で真似て答えた可能性もあるが、それを感じる。

節分翌日の保育園ごっこ [3. (6) ③] も、一番小さいクラスの子になることで怖かった思いを素直に表現できるからではないかと思う。私の見解に、その遊びに居合わせた保育者は「ごっこ遊びで子どもが選ぶのって実年齢より大抵は上 (ex. お母さん) か下。5歳児も普段からよくバブちゃんになると言っているよ」と疑問を呈する。確かに、私もそういう姿にでくわしたことがある。だが普段からよく赤ちゃん役をしても、鬼から手紙が来たという設定で「私たちタンポポ組ね」と言うところに、年長であるため実際の節分では思いきり出せなかった怖さを存分に出せるので選ばれているのではないかと思う。

#### (9) 自分の考え・意見を言う、話し合うこと

5歳児ともなると、1年前のこともよく覚えていて、自分の記憶をたどりながら様々な考えを言葉や動作で表現し、仲間の記憶の表しや保育者の問いかけに触発されたり、自分の考えを確認しながら話し合っている。保育者の方もこの園で5年目になるので、子どもの言おうとすることも想像がつく。その部分を受け止めたり、もう少し確かにしたい部分はわざととぼけて、子どもの発言を引き出してみたりしている [3. 波線]。互

いの中にある経験のため込みで、考えを出し合い、また、他者の考えを理解し合いながらコミュニケーションが成立している。モエは自分の家にあるヒイラギをとる体験や植物に現れた自然の変化について、みんなの前で言葉で説明する機会を広げている。

#### (10) 押し量ること～鬼の酒盛りをめぐる

保育者としては酒盛りのイメージだったが、大きな盃がなく代わりにお椀を投げておいた。子どもは店でラーメンを注文すると、熱くて食べられないので冷まして食べるためや小分けする食べやすさからお椀が付いてくる。その経験からお椀イコールラーメンとなった[3. (5) ③点線]と保育者。自分の経験からその場の状況を押し量り、それを仲間と確認し合ったり、保育者に伝えている。過去の体験と現状を結びつけて推測し、目の前で繰り広げられたかのように見たり感じとったりする認識能力が育っている。

#### (11) 畏怖体験と乗り越え・自負

子どもが見せた鬼への反応から、鬼はやはり怖いもの、恐ろしいものに尽きるであろう。タケキは震えるほど怖いのに園では戦うと言っていて、家に帰るととても怖がって1人でトイレに行けないなどで家人の手を煩わせることが多くなったという。担任は母親に「あー、早く終わってくれないと困るな」と言われていて、タケキに「本当はどんなの？正直に言ってごらん」と一対一で聞いたりもしたそう。タケキは「本当は怖いけど、してみたいけど…」と答えたそうで、やめるのかと思ったがやめなかった。

検討会では、音だけでやっても子どもには怖いもの、年長児で人（～の父親）だと思っても怖いという子どもの姿があった。「どこに行くのにも怖がってオシッコをもらってしまっ困る、もうやめてもらいたいよね！」という苦情が来たこともあるという話が出た。節分当日は怖いから園を休む子が出ることもいろいろな園であることだった。

3. (2) でも、年下のクラスや、自分たちのクラスの中でも怖がっている子どもを守ろう、逃げずに一体となって立ち向かおうという気持ちで団結していく。4歳児のように安易に隠れようとはせず、本当は隠れたくても、そう簡単に言えないのもその自負によるのであろう。だが、これには、「保育者の側に怖いだろうが立ち向かっていって欲しい、園内の最年長として年下の子を守るような気持ちになって欲しいという思いがあった」と担任が振り返っているように、クラスの子どもへの保育者の思い、節分行事の持ち方の方向性とかかわっている。保育者の思いを子どもが察知し、汲んでいる姿とも言える。

「前日の黒い雲に覆われていた空とは違い、翌日は明るい空だった。鬼の存在を信じ、この1週間、鬼のイメージを膨らませていた年長S男は、朝、外を見て『今日は福の神だ!』と言う」と担任が節分の翌日の子どもの様子を書いている。鬼の存在は周囲の景色を一変させ、鬼に打ち勝って平穏が戻った時には、鬼の存在によって周囲の風景は際立って晴れやかに感じられたのだろう。周囲の自然の見え方は、見る者の心のあり



ようを反映してその人に捉えられる。

## 5. 保育者側の思いの建前と本音

鬼は来なかった、パパが鬼になったという子どもの言葉が示すように、家庭の豆まきでは鬼は登場しないこともあるし、家族の誰かがお面を付けても怖さはでにくい。豆に付いてくる紙製の簡易なお面ならなおさらで、顔を覆っても近い人と分かるだろう。3歳児と5歳児をもつ、ある若い父親は、「節分は家庭で一応やることはやるが、幼稚園（保育園）でやってくれるでしょ。あまり怖がらせない。あとが大変だから…」と話している。怖がらせることも少ないし、どこかで怖がっていても泣き叫ばせたりはしない。

ここに登場するのは子どもにとって怖い鬼である。顔色が変わるほど、オシッコに行けないほど、園を休むほど…。そこから膨らむイメージも乗り越えもある。もちろん、怖さゆえの楽しさも…。怖くないお化けの登場は『オバケのQ太郎』（オバQ）に代表される。子どもを怖がらせることへの批判もある<sup>31)</sup>が、お化けや鬼、暗がりなど怖いものを恐れることもそれに向かって勇気を奮い立たせたり力を合わせて知恵を絞ったりと子どもの育ちに有意義である。現代は夜になると街灯が道々を明るく照らし、町中はネオンサインが瞬いて闇夜の暗がりもなくなり、あの暗がりになんかが潜んでいるかもしれないと恐れることも少なくなっている。日常親しく交流しない、得体のはっきりしないものを恐れて保育者や仲間と肩寄せあって過ごす体験は園行事ならではだ。

3. で描いた節分行事の5歳児担任は、事例検討で以下のように振り返っている。

今年も①節分の由来を伝えながら、豆まきを楽しみたいと思っていた。節分行事について②鬼の話聞き怖がりながらも楽しんだり、③自分の中にある鬼を考えることで、自分の弱いところを見つめたり、④皆で話し合う機会をつくり人の話を聞きながら自分の意見を言えるようになってほしいという思いはあった。

ただ、後付けだとも言っている。①③は由来と絡めて、一般的に節分で求められることであり、④はこの年齢では何かにつけて保育者が盛り込んでいくことである。よく家庭で行われてきたであろうように、ただ豆を撒くのではなく、何日も準備して怖い鬼を登場させる節分をするのはなぜだろうか（②）。

担任は「あまり怖がらせないようにすると言いながら、鬼の存在を信じるように鬼の話や登場も工夫して盛り上げている。結局は、大人が鬼騒ぎを楽しんでいるのかとも思った」と矛盾について語っている。節分行事担当者は「怖がらせる方が、盛り上がって面白い」と話す。それらしいねらいはあるにしろ、本音はここにあるのではないだろうか。準備など大変でも、保育者の方が子どもと楽しみたい思いが強い。また、いつ頃から節分行事にむけての話を出すのかという私の質問に、「しょっちゅう言っている」と話す。3. で見たように、鬼から手紙がくることを取り組みの始まりとすれば、1週間かけて作っ

ていくと言えるが、例年そうして醸され続ける鬼は、その年の12月のケンスケの姿 [3. (7)] のように、年間を通して話題になり、子どもの側に恐れと同じくらいの期待も生んでいるのではないだろうか。

3. で詳述した年度の翌年の節分では、怖がらせることに配慮の必要な子どもがいて、節分の前から鬼の手紙で雰囲気醸していくようなやり方はしなかった。しかし、子どもたちは鬼の手紙は絶対に来ると待っていたし、来ないのはおかしいと節分当日もギリギリまで探していた。保育者の方も、鬼の手紙が来ないのをいぶかって探す子どもたちに「手紙が来ないから鬼も来ないよ」と言っていたのに、節分当日は前年の赤鬼に加えて青鬼も登場させ、例年と違ってそれまで静かだった分、子どもたちはびっくりして大騒ぎになった。鬼が去った後も、「去年一つで今年は二つだったから、来年は三つ来るかも…」と子どもだけでなく保育者も言っていて、保育者の当初の‘配慮’はどこかへ吹き飛んでいた。こうした姿は、この園における節分への保育者の本音の部分とその中で育ってきた子どもというものをよく表していると思う。

3. 及び4. で見てきたように、園行事節分の鬼から膨らむイメージも乗り越えももちろんあるし、作る、数える、話し合う、考える、伝え合うなどのさまざまな経験もする。しかし、それが目的というより子どもと盛り上げ園行事節分を作っていく楽しさが魅力的なのではないか。実際、その中で子どもは実に愉快的発想をする。すべての行事にこんなに時間をかけるわけではなく、気を抜いた行事もあると保育者は言う。例えば、3月のひな祭りは、さりと、やったことにするという程度である。鬼という架空の存在が、子どもとやりとりしやすく、ファンタジーの世界を作りやすいということもあるだろう。

## 6. 節分のレクリエーション化の傾向と怖い鬼体験

家庭で行う行事のうち、誕生日のように場合によっては以前より広くかつ華やかに催されるものがある一方、こうした伝承行事は行われなくなりつつある。園で取り組む意義もあることだろう。また、農家の後継者離れが進み、農村地帯でも勤め人の保護者が多い。高速交通網の発達で仕事の範囲も広がった。節分は伝承行事だが、3. (6) ②の子どもの言葉から知ることのできる各家庭の節分・豆まきは、厄払いの伝承行事にあやかかった一種のレクリエーション的なものになっていることもうかがえる。番号を仕込んでビールが当たるのや、「昔は坊主豆（大豆）だけだったが、その後（子ども向けに）落花生や飴やチョコを混ぜるようになった。今はみかんや汁粉をまく家もある。大豆は拾いにくい外に、値の張るものは家の中にまく」という話を聞くと、生活の豊かさとも関係があるのだろうが、建前の儀式のようなイメージが混在しているようでもある。

だが、土地に無縁なヒイラギ、生のイワシをビニールに入れる、大豆を食べて戦う、鬼を可視化することや戦う存在として位置づけることなど、園行事節分もレクリエー

ション化している部分がある。園行事として取り入れる際に、文化を伝承することと園文化の伝承をどう考えるのか、難しくても問いつつ進めていく必要を感じた。乳幼児期の体験はどんなに印象深くても、その多くは大人になった時には残っていない。だが、冬と春の狭間で周囲の自然に触れた体験や印象深く心に刻まれたことは、子どもの中で子ども時代や郷土への原風景となり、郷土を愛する思いの源となっていくと私は思う。保育者の役目はそうした土台を作ることである。

## 7. 今後の課題

ここで見た「子どもが（鬼を）怖がって困る」「怖がらせないでほしい」という保護者の言葉は、園や保育者との関係の中ですぐに改善を求めるものではない。保護者も遠慮なく保育者にもものを言い、かつどこかで互いに容認している感覚がある。だが本当に「多忙な大人の手を煩わす苦情」として表面化した時、あるいはそう受け止めた瞬間から、各園、1人1人の保育者はどう対応するのだろうか。近年、保育のサービス化こそが是、保護者が働きやすいようにそのニーズに応えるのが保育という風潮が目立つ。公立園ならば公務員としてその従事者たるべしという意識づけも進む。保育所保育は、託児、家庭保育の補完を行う歴史ももつ。保育者は何を守り、何を捨てるのか見続けたい。

また、保育所・幼稚園で優しい鬼の絵を目にすることが多くなったという声もある。優しい鬼が登場する節分の子どもの体験と育ちについても考え、保育者がどんな鬼のイメージで取り組むかによって子どもの体験や育ちがどう違うのか、また、大都市の園行事節分の様子や都会の子どもにとっての鬼はどんなものか本稿と比較検討してみたい。

## 謝辞

長年にわたり、職員とは違う存在としていつもそこにおいて保育を見続け、聞き続けることを許されてきたことを、出会った保育者と子どもたちに心から感謝しています。また昭和61年より、よりよい保育実践を求め続けてともに事例検討を重ねてきた検討会のメンバーとの忌憚のない話し合いは、保育実践の奥深さを楽しく、刺激的に学び続ける場でした。皆様との出会いとお付き合いにも感謝申し上げます。

## 注

(注1) 鳥追い—農村行事の一。正月14日の晩と15日の朝との2回、害鳥を追い払う歌をうたい、若者たちが、ささら・槌・杓子・棒などを打って家々を回るもの。[この地方は拍子木を打つと思う/筆者]

(注2) かんじき—雪中に足を踏み込まぬため靴・藁靴などの下にはく、木の枝または蔓などを輪にしたもの。[この地方のものは竹と縄（今はロープ）で作られている/筆者]（以上、新村出編：広辞苑第4版 岩波書店1991より）

## 文献

- (1) 大場牧夫 (1983).「座談会からの提言 保育と行事の問題を考える」保育研究Vol.3 No.4 相川書房.33
- (2) 久保田浩 (1967).「<領域別>幼稚園・保育園100科①生活と行事」誠文堂新光社
- (3)(4) 前掲 (1).32-33
- (5)(6) 村石京 (1992).「子どもたちの育ちを見つめて—お茶の水女子大学附属幼稚園の生活から—」フレーベル館.39
- (7) 久富陽子 (2015).「行事をめぐる一考察～現代における行事と園行事の教育的価値～」保育の実践と研究 Vol.19 No.4 スペース新社保育研究室.8
- (8) 河邊貴子・戸田雅美・金澤妙子 (2010).「特集：第11回保育の実践と研究シンポジウム<討論採録>節分行事を考える」保育の実践と研究Vol.15 No1. スペース新社保育研究室.19
- (9) 古橋さつ子 (2009).『園行事としての「節分会」』保育の実践と研究Vol.14 No.3. スペース新社保育研究室.37-39
- (10) 小澤いつ子 (2009).「園の節分行事」同上.40-41
- (11) 鹿末ひろ江 (2009).「鬼と邪気を払う」同上.42-43
- (12) 山本哲郎 (2009).「鬼のすみか」同上.44-45
- (13) 柳友佳 (2012).「節分のこと」保育の実践と研究 Vol.17 No.1 スペース新社保育研究室.59
- (14) 山口公子 (2012).「なんだか迷ってしまった、節分」同上.60-62
- (15) 北村都美子「年長児の行事の取組を振り返る」前掲 (7).11-18
- (16) 西宮京子「1年間の園行事における幼稚園と保育園の連携」同上.20-27
- (17) 井上初代・高柳恭子編著 (2001).「子どもの確かな成長を育む幼稚園の行事1 新時代の保育の設計を提案する 発表会」明治図書
- (18) 井上初代・浅見容子編著 (2001).「子どもの確かな成長を育む幼稚園の行事2 新時代の保育の設計を提案する 誕生会・入園式・卒園式」明治図書
- (19) 井上初代・五十嵐市郎編著 (2001).「子どもの確かな成長を育む幼稚園の行事3 新時代の保育の設計を提案する 遠足・園外保育」明治図書
- (20) 井上初代・小林研介編著 (2001).「子どもの確かな成長を育む幼稚園の行事4 新時代の保育の設計を提案する 誕生会・入園式・卒園式」明治図書
- (21) 井上初代・中臣浩子・小林研介編著 (2002).「子どもの確かな成長を育む幼稚園の行事5 新時代の保育の設計を提案する 発表会」明治図書
- (22) 奥山順子 (1997).「幼稚園と家庭との連携—園行事の実施と幼稚園教育の役割—」秋田大学教育学部教育工学研究報告第19号.113-124
- (23) 金城文子 (1994).「幼稚園教育を充実させるための家庭との連携～園行事を通して～」(沖縄県浦添市立当山幼稚園) 第11期研究報告収録 浦添市立教育研究所.1-22
- (24) 柏原栄子 (1987-1996).「幼稚園における運動会に関する一考察」(1)-(10) 日本保育学会第41-50回大会研究論文集 [10年間の継続研究発表]
- (25) 柴崎正行・田代和美 (1992).「わが国の幼稚園における運動会の起源について」保育学研究.117-127
- (26) 柴崎正行 (1993).「なぜ幼稚園で運動会をするのか」幼児の教育10月号.10-18
- (27) 学校法人ひなぎく幼稚園「平成24年度 行事による感想と見直し」(大阪府河内長野市)  
<http://www.hinagiku-kg.net/index.php?data=/data/19/> (情報取得2015/03/23)
- (28)(29)(30) 萌文書林編集部編 (2009).「子どもに伝えたい年中行事・記念日」萌文書林.153
- (31) 山本幾代 (2010).「その鬼、待った！」前掲 (8).61-63

付記：本稿は「雪国における園行事節分考」（保育の実践と研究Vol.14 No.3. スペース新社保育研究室.10-36）全体を修正編成、その後の観察を加筆した。

(2015年3月27日受理)